「学校が燃えちゃった」
～それは「思い出したくない記憶」でしたが
あの校庭の大イチョウの木が私の心の支えでした～

荒井　清さん（昭和 10 年生まれ）

はじめに　～館山市から八生村松崎への転居～

私たち一家は、私が八生国民学校に入学する前年、太平洋戦争が勃発寸前の昭和 16 年 9 月まで父の勤務先の関係で、当時空軍基地のあった房総半島最南端の館山市に住んでいました。

アメリカ・中国・オランダ等の連合国と日本との間に不穏な空気が漂い始め，その戦火を避けるということだったのでしょうか。父母の実家に近い印旛郡大森町（現印西市）に転居することになったのですが、昭和 16 年の大洪水によって北印旛沼周辺が冠水し、私たち一家は、家具・家財などの荷物も下総松崎駅から先には進めず，八生村（現成田市）松崎に家を借りて住むことになりました。大家さんはじめ地域の皆さんにも温かく迎え入れられて、その後も引き続き松崎に家を持ち、以後私たち一家はこの松崎の地を終の住処と定め、85 年にわたる我が家の歴史をつむぎ重ねてきたのです。

1．昭和 17 年 4 月八生国民学校に入学　～私はいじめられっ子だった～

私は入学してすぐ「いじめられっ子」になってしまいました。それは館山市北条幼稚園に通園している時、「来年は小学校に入学」ということで、母方の祖父がランドセルや帽子など服装を一式揃えてくれ、その格好で八生国民学校の門をくぐったのです。この服装が村の子とあまりにもかけ離れていたのでしょうか。とたんに、同級生だけではなく上級生からも帽子を取り上げられたり、靴を隠されたり、時には礫を投げつけられたりという「いじめ」の対象になってしまったのです。

でも、その「いじめ」は、現在問題となっている「異質なものを排除する」という「陰湿ないじめ」ということではなく、ただ「自分たちと違う者への興味関心」、さらに解釈すれば「近寄ってみたい」という「親近感」のようなものであったとのだと理解できるのですが、元来気が弱く内気な性格の私には、なかなか学校や同級生の中に馴染み打ち解けることが出来なかったのです。

2．校庭のイチョウの大木　～あの逞しい大木に目を見張り励まされてきた～

八生小学校の校庭には、今まで見たこともないようなイチョウの大木がありました。一人ぼっちでこのイチョウの木を眺めていると何故か気持ちが落ち着き「がんばれ！」と、励まされているような気分になったものです。

腕白な上級生がこの木に登り、「おおい、印旛沼が見えるぞ！」という自慢いっぱいの声を聴く度に、いつか僕も「登ってみたい」と、思い憧れ、「僕も、あのイチョウの木のように逞しく、強くなりたい」と、思ったのです。

3．昭和 16 年 12 月 8 日、太平洋戦争勃発　～突然、その時から臨戦体制の日常生活が始まりました～

（1）母は、竹槍、防空頭巾、バケツなどを備えての防空演習に

館山市に住んでいる時も、松崎に転居してからも、隣組の人たちが集まり、敵機の来襲による被害を防ぐための訓練だったのでしょう。定期的に夕方になると、母親は防空頭巾を被り、竹槍やバケツを持って訓練に出かけて行ったことを覚えています。

（2）「修身」という教科の授業

学校で学ぶ国語や算数の教科の授業のほかに、「自分の行いを正し、身を修めようと努力する」という、つまり、「個人生活・社会生活に必要とされる道徳観や、国家への忠誠心を身に着けさせる」修身という教科の時間がありました。

ある日の修身の時間、「皆さんは大きくなったら何になりたいと思いますか。」という先生の問いかけに、みな元気よく手を挙げて、男の子は、「僕は、陸（海）軍大将になって、敵をやっつけます。」女の子は、「私は、看護婦さんになって兵隊さんを助けたいと思います。」と、クラスの友達がみな気に答える中で、私はただ一人うつむき小さな声で、「本屋さんになりたい」と答え、大好きな先生を困らせてしまったことを、妙に鮮明に覚えています。

とたんに、みんなの前で「清ちゃん、今日はお残り」と言わせてしまいましたが、放課後だれもいなくなった教室で先生は、「立派な本屋さんになってね。」と、優しく言ってくれました。

（3）奉安殿

※奉安殿

御真影・教育勅語謄本などを奉安するために学校の敷地内に作られた施設。1920 年代後半から 30 年代に普及。（広辞苑より）

八生小学校には、学校より願い出て宮内省から下付されたという天皇皇后の写真と教育勅語謄本が、学校敷地内に作られた立派な石造りの奉安殿に納められていました。私たちは登校すると毎日奉安殿の前に整列して、「今日もお国のために一生懸命勉強します。」と誓ってから、一日の学校生活が始まりました。

（4）教育勅語

※教育勅語

明治天皇の名で国民道徳の根源、国民教育の基本理念を示した勅語。
1890 年 10 月 30 日発布。御真影とともに天皇制教育推進の主柱となり、国の祝祭日に朗読が義務づけられた。（広辞苑より）

私たちは、毎日この直後を一生懸命暗記し、その意味もおぼろげながらも分かったような気持ちになり、部分的にですが、今でも「朕オモフニ我ガ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠二・・・・・・」と、口ずさむことが出来ます。

4. 昭和 20 年 2 月 16 日・・・八生国民学校が焼失した日

～米軍グラマン戦闘機、校舎に激突して全焼～

（1）学校が燃えてしまった日

ア. 警戒警報のサイレンと半鐘

～「今日、学校はお休み。早く家に帰りなさい！」

3 年生になった私は、相変わらず内気で気の弱さは変わることがありませんでしたが、学校生活にも慣れ、服装や言葉遣いなどもすっかり八生村の子・松崎の子になっていました。学校の行き帰り（ほ

んの 500 メートル足らずという短い距離の通学路でしたが）畑の桑の実を採って食べたり、バッタを追いかけたりして、いつも道草をして遊んだことが懐かしく思い出されます。

昭和 20 年 2 月 16 日、その日は快晴でしたが寒い朝でした。大家さんのヒロ子ちゃん、隣の同級生、幸ちゃんと弟のツグちゃん、同級生の梅乃ちゃんと常男君、四年生のアキヤス君、そして私と弟、みな誘い合って元気よく学校に向かいました。

その頃，毎日のように発令される警戒警報のサイレンには慣れてしまったのでしょうか、サイレンと半鐘の鳴る中、いつものように校門を入った時、そこに立っていた間宮先生が「今日は学校をお休みにします。早く家に帰りなさい！」と、大きな声で叫んでいたのです。

私たちは仕方なく家に向かいましたが、みんな腕白盛り・遊び盛りの男の子たちは、学校から 200 メートルと離れていない諸岡アキヤス君の家にいつものように立ち寄り、「メンコ」だったか「ベイゴマ」だったか思い出すことはできませんが、時が経つのも忘れ遊び興じていました。

イ. 空襲警報　～「急いで！うちの防空壕に入りなさい！」～

突然のけたたましいサイレンの音・打ち鳴らされる半鐘に驚き、私たちはどうしたらよいかわからず右往左往していましたが、「急いでうちの防空壕に入りなさい！」というアキヤス君のお母さんの大きな叫び声に促されて防空壕に潜った途端，私たちは轟音とともに何かを切り裂くような鋭い音に驚き、防空壕の中で震えながら皆体を寄せ合っていた時、体がもち上げられるような感覚と同時に、体中に響く「ドーン」という大きな音がしました。ただ恐ろしさのあまり皆ずっと抱き合っていましたが、そのうちに、「シーン」と静けさが返ってきたような気がしたのです。

ウ.「大変だ、学校が燃えている！」

いつも一番腕白な常男君が、恐る恐る防空壕から顔を出した途端、「大変だ！学校が燃えているぞ！」と、泣きながら私たちのほうに向かって叫んだのです。皆、防空壕から這い出して目にしたのは、目の前で校舎が火を噴き、燃え上がっているという恐ろしい光景でした。みな衝撃のあまり、ただ声もなく震えながら呆然とその光景を見つめていただけでした。今その時の記憶をいくら辿っても、ただ恐ろしさだけで、「誰がどうした」とか、「私たちの周囲の様子はどうだったか」「その後、私たちはどうしたか」ということなど、何も思い出すことが出来ません。

エ. 私と弟を抱きしめてくれた母　～憶えているのは、ただそのことだけです～

私の母は、明治の富国強兵政策による申し子とでもいうのでしょうか。三人の弟（私の叔父たち）・六人の妹（叔母たち）の，十人きょうだいの長女として育ちました。

下の妹や弟の面倒を見るということだったのでしょうか、明治生まれの田舎の女性には珍しかったそうですが、小学校を卒業するとすぐ、千葉市にあった医科大学の付属看護婦（土）・産婆（助産婦）養成所に入り、卒業と同時に同じ大学付属病院の看護婦となり、その後、秋田県本荘市の病院で看護婦・産婆として働き、弟や妹の待つ実家への仕送りを欠かすことなく続けたのだそうです。

結婚し、私たち兄弟が小学校に入学したのを機に、松崎の地で産婆を職業として、また働き出しました。

学校が燃えたその時、母は数日前に産まれた赤ちゃんの湯浴みに、学校の近くの官舎に住んでい

た染谷校長先生のお宅に行っていました。学校の火災に驚いた母は、私たち兄弟のことが心配になったのでしょう。火の粉を避け遠回りをして我が家へ駆けつけたのですが、私たち兄弟は家には帰っていませんでした。ほうぼう心当たりの場所を探し回ったのでしょう。私たち兄弟を見つけた母は、泣きながら二人を強く抱きしめてくれました。

あの学校が燃えている時の記憶は、トラウマというのでしょうか。夢の中で魘され目が覚めてしまうことがあり、「忘れたい」と思ってきましたが、あの時の母の姿だけは、この年齢になっても忘れることは出来ません。

オ. 墜落したアメリカのグラマン戦闘機が校舎に激突して炎上

後から知ったことなのですが、あの時防空壕で体が持ち上がるような衝撃を覚えたのは、アメリカのグラマン戦闘機の操縦士が日本の戦闘機との空中戦で頭部を撃ち抜かれて操縦不能となり、その飛行機が、私たちが潜っていた防空壕からわずか 50 メートル程先の畑に墜落し、更にその畑でバウンドして飛び上がって，そのまま校舎に激突したとのことでした。その時炎上したグラマン戦闘機と校舎を、私たちは目の当たりにしたのです。

※グラマン戦闘機
第二次世界大戦中のアメリカ海軍とグラマンが開発した代表的な艦上ジェット戦闘機。日米開戦後、日本のゼロ式艦上戦闘機に対抗するため、急遽つくり上げた。（ブリタニカ百科辞典）

※ゼロセン式艦上戦闘機
日本海軍の戦闘機、太平洋戦争直前に完成した高性能の戦闘機（広辞苑）

カ. 私たち児童も、先生方も、みんな無事だった

当日の朝、「今日はお休み、家に帰りなさい。」という判断をし、校舎に入れなかった校長先生はじめ、先生方のその時の適切な判断と処置がなかったとしたら、「私たちも、先生方も、どうなっていただろうか」。今、その時の状況を考えただけでも体が震えるような気持になります。私たちを帰した後、先生方は学校の防空壕に入り、校長先生は奉安殿に走り御真影と勅語謄本を胸に抱いて防空壕に入ったと伺いました。

（2）私たちが毎日学んだ校舎も奉安殿も跡かたもなく消えていた

次の日だったと思いますが、私の両親や近所の方々と一緒に学校に向かいましたが、そこで見た光景は、昨日まであった校舎は跡形もなく消えてしまい、ただ焼け跡から薄い煙が漂っているだけでした。毎日拝んでいた立派な石造りの奉安殿はグラマン戦闘機のエンジン部分が激突して、破壊されてしまったということでした。

（3）その後も毎日のように空襲があり、怖い思いをする日々が続きました

ア. 勉強よりも勤労奉仕の毎日だった

勉強をする教室が無くなってしまったので、私たちは毎日学習道具とムシロを持って登校し、そのムシロを校庭に敷いて勉強することになりました。もちろん、雨が降ったら学校は休日になりました。

しかし、勉強といっても、今まで教室で勉強したように国語や算数、図画や習字のような学習をした

記憶がありません。毎日、校庭で焼けただれ溶けて固まったガラスやその破片、焼けて錆びた釘や鉄片などを拾い集める作業が多かったように思っています。

それに、私たちには何に使うのか分かりませんでしたが、あちこちにかすり傷をつくりながら藪の中に入り、フジ蔓を採ってその樹皮を剥いたり、松根油という航空燃料を集めるということで、泥だらけになって松の木の根を掘ったりすることもありました。また、兵隊さんの栄養源、軍馬の飼料にするということだったのでしょうか。宿題として、田んぼでイナゴを捕え、茹でて乾燥させたもの、草を刈って乾燥させたものなど学校に持ち寄るという宿題もありました。農家の子ではない私には、親に手伝ってもらうことも出来ず、親子共々辛くて悲しい宿題の思い出になりました。

※ムシロ（筵）
わら・竹などで編んだ敷物（広辞苑より）

イ.「二人だから、死んでも怖くないよね。」 ～僕たちの頭上をグラマン戦闘機の編隊が～

四年生になり担任の先生は、小倉先生という若い男の先生になって勤労作業の日が多くなりました。

航空燃料にするということで、私たちは学校から約 2 キロメートルくらい離れた根木名川の堤に「ヒマ」という植物の種を蒔き、それを育てるための水遣りに、毎日二人ずつの当番がありました。

私と同級生の下村ミツオ君がその当番になった日、急いで水遣りを終わらせて学校に向かい、下福田集落前の田んぼの畦道を走っている時でした。後方からグラマン戦闘機の編隊が轟音を響かせ、低空で飛んできたのです。私とミツオ君はバケツを投げ出し、急いで田んぼの中に伏せました。ミツオ君の手を握り、「二人だから、死んでも怖くないよね。」と震えながら囁いたことを忘れることが出来ません。脅しのための機銃掃射だったのでしょうか。ババッ、ババッという音とともに、目の前の畑に砂煙が上がったのが見えました。

※ヒマ（唐胡麻のこと）
種からヒマシ油をとる一年草。薄黄色の花を開く。（広辞苑より）

その頃、頻繁にグラマン戦闘機の来襲があり、成田線を走る蒸気機関車が成田駅・下総松崎駅間で襲撃され、機関士の方が亡くなったという話を聞いたことがあります。

ウ. 昭和 20 年 3 月 10 日・東京大空襲 ～西の空が真っ赤に染まっていた～

「援農」と言うのでしょうか。大家さんに数名の大学生が寄宿して、慣れない農家の仕事を手伝っていました。3 月 10 日、あの東京大空襲があった日、いつも私たちと遊んでくれていた大学生たちは、「今日は学校に集まる日なので‥‥。」と東京に帰っていきましたが、当日も次の日もずっと、大家さんの家に帰って来ることはありませんでした。

3 月 10 日の夜、印旛沼の方向・東京の空が真っ赤に染まっている様子が見えました。その後数日にわたって焼け焦げた手紙や紙片が空から舞い散ってきました。ちぎれて焼けた紙幣が舞い落ちてきたということも、聞いたことがあります。

5. 終戦～私は、敗戦を悲しむことより、戦争が終わってホッとした気持ちのほうが強かった

その日、ラジオの性能もよくなかったのか、私には、天皇陛下のお言葉の内容がほとんど聞き取れず、その意味もよく分かりませんでした。しかし、ラジオの前に集まった大人の方々のその時の雰囲気から、「日本は、戦争に負けたのだ」と分かりましたが、私は、それを悲しむというより「もう、明日から恐ろしい目に遭うことはないんだ。」と、心の底から、『ホッ』としたのです。でも、顔の表情が緩んでしまったことを何とか隠そうとしたことを覚えています。大家さんの家に集まってラジオを聞いていた大人たちは茫然自失というのでしょうか、皆うつむき顔を覆い、中にはすすり泣いている人もいました。

6.「教育村」と言われた八生村の人々は、学校再建に熱い思いを抱いていた

戦前から地方の村としては珍しく、県立の農学校（現在の西陵高校の前身）、村立の実科女学校、八生小学校高等科などがあり、さらに東日本の西洋医学発祥の地・佐倉の順天堂病院と並び称される外科手術で有名な入院棟も備わった北総地区医学の中心として尽誠堂病院が松崎（跡地が現八生公民館になっている）にあったのです。したがって、村長さん病院長さんをはじめ村民の近代医学や教育に対する関心度が非常に高かったと思えるのです。

（1）村人総出で建てた藁葺き屋根の仮校舎

昭和 22 年 4 月学校制度が変わり、私たちの学校の名称もまた八生小学校となりました。

旧実科女学校の間借り教室、校庭のムシロ敷き教室から、「何とか、屋根のある教室で勉強させてやりたい。」という村人の願いから、村の大工さんや消防団・青年団、様々な仕事をしている人たちが総出で、校庭の西側に大きな藁葺き屋根の仮校舎を作ってくれました。私たちは、その大きな教室で学年ごとに分かれて勉強をしていたのです。しかし、春の嵐という強風に重い茅葺の大屋根の校舎は持ち堪えることが出来ませんでした。幸いと言っていいのか、その日は休日でこの建物には誰もいない時、あえなく倒壊してしまったのです。

（2）待望の屋根のある新校舎が落成

藁葺き屋根の仮校舎倒壊後、終戦で廃校になった四街道の元陸軍砲兵学校の校舎が国から払い下げられ、解体した木材を村人の馬車や列車などで運搬し、焼失する前まであった校舎の跡地に移築、念願の屋根のある校舎が完成したのです。

（3）この仮校舎の教室を使った式場での卒業式

私たちは 6 年生になり、卒業の日も近づいていました。学校制度が変わって新制の中学に進学することになったのですが、小学校での同級生は変わらずにそのまま進学して中学生になるのです。中学生と言っても、どこの校舎で学ぶのかも分からず、卒業の喜びとか感慨とかが湧かないまま、卒業の日を迎えたような記憶があります。

それでも卒業式は、建てられてすぐの屋根のある校舎で挙行されました。

二つの教室の境を取り払った式場で、卒業生と先生方だけが列席したささやかながらも、心のこもった校長先生の式辞や先生方の姿に、小学校生活の様々な出来事に思いを巡らした感慨深い、厳粛な卒業式だったように記憶しています。

7. 今、八生小学校は成田市立八生小学校となって　～あの私の大好きなイチョウの大木は～

明治政府の近代国家確立の重要政策としての学校制度改革とともに明治 6 年押畑地区で開校その後、現在の松崎に移り以来百数十年、松崎の地で八生小学校が歩んだ歴史、特にあのグラマン戦闘機の

激突による火災の炎熱にも耐え、ここで学ぶ子どもたちの悲喜こもごも余すことなく、温かく見つめてきた生き証人としての大イチョウ。そして私が入学以来、困った時も悲しかった時も温かく支えてくれた逞しく堂々とした大イチョウです。

この大イチョウは、毎年変わることなく春を迎えると寒さの中で蓄えた命を力強く芽吹かせ、夏には緑の葉を茂らせ、また秋には黄金色の銀杏をたわわに実らせて、樹下に黄色の絨毯を敷きつめます。そして今日も、「凜」とした姿で大空に向かって聳え、温かな眼差しで子どもたちを見つめています。

8. おわりに

今この八生小学校で学ぶ子どもたちは、冷暖房の空調施設のある教室や広い体育館、図書室や理科室、家庭科室など、教材や備品が整った特別教室、そして広い運動場で元気に明るく、充実した日々を過ごしています。

この子どもたちには、私たちが経験したような「悲しく、恐ろしい体験を二度とさせてはならない。そして、戦争のない平和な世の中がいつまでも続いてほしい。」と願わずにはいられません。

そして子供たちには、「今あることの幸せ、平和な生活を送ることが出来る有難さを噛みしめながら日々を過ごしてほしい。」と心から念じながら、終わりとさせていただきます。

9. そして、最後に

あの大イチョウの木は、「今のこの地の平和を喜ぶと同時に、世界各地で未だに続く戦争を『愚かなことだ。』」と、歎いているに違いありません。

ありがとうございました。

合掌